

ふるさとを誇りに思う生徒を育てる教育課程の創造 ～伊勢崎銘仙によるふるさとと学習の実践とその成果～

太田市立南中学校(前伊勢崎市立境北中学校)
教頭 大栗 和美

1 はじめに

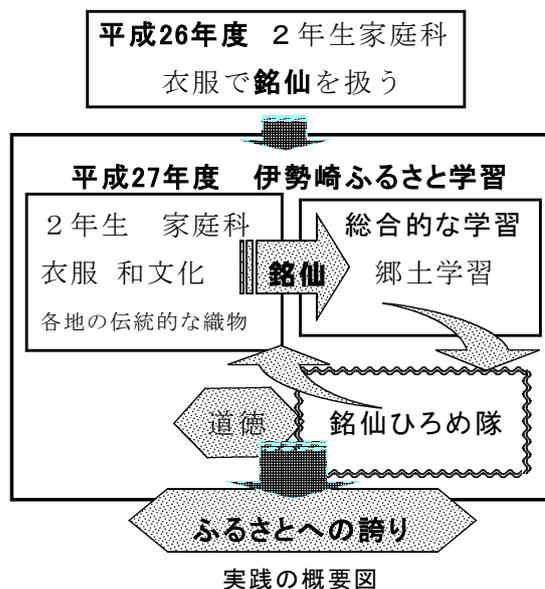
平成27年12月、中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」において、学校という場を核とした連携・協働の取組を通じて、子供たちに地域への愛着や誇りを育み、地域の将来を担う人材の育成を図るためにも学校を核とした地域づくりを推進していくことが重要と提唱された。また、第2期群馬県教育振興計画において「郷土に誇りをもてる学びを推進する」とあり、これら時代の要請を受け伊勢崎市教育委員会では、以下の主旨を掲げ「伊勢崎ふるさとと学習」を推進してきた。

ふるさとと学習を通して養蚕や絹産業等の地域の産業や歴史・文化を学ぶことで、自分の生まれ育った地域の良さを知り、ふるさと伊勢崎に誇りをもってほしいと思います。また、伊勢崎市の産業を発展させた人達が海外へも進出していったことから広く世界に目を向け、異なる文化や考えをもつ人と積極的に交流して欲しいと思います。

このように学校教育において郷土への誇りをもつ子どもを育てることは、やがて成人となって郷土に戻り、郷土に生き、郷土を築き、発展させていく市民をつくるという重要な役割を担うことにつながるのである。私が昨年度まで勤務していた伊勢崎市立境北中学校は、住まいのある地元の学校であり、私が教頭職として初めて勤めた縁ある学校である。しかし、私自身は地元住民としても郷土について多くを知らず、また教頭としても郷土を学習材とした教育活動への意識が希薄な現状にあった。そこで、私自身が自ら郷土について学び、その価値を生徒とともに認識し、新たな学習活動として取り組むことにした。その主軸となったのが、歴史的に価値のある伊勢崎銘仙であり、銘仙を通して郷土に生きた人々の姿に触れることで、ふるさとを愛し、誇りに思う生徒を育てていくことができるのではないかと考えた。それが、ひいては学校を活性化させる価値ある教育課程の創造につながることを願い、実践に取り組んだ。

2 実践の概要

「伊勢崎ふるさとと学習」の実践は、既存の教育課程において上記の主旨を達成することを目指し平成27年度に家庭科の教科学習と絡めて取り入れた。家庭科の教諭が2学年の衣服分野の授業を行い、それにつなげて総合的な学習の時間で私も授業を行った。「伊勢崎銘仙を私達はなぜ知らないのか」というテーマを投げかけ課題解決的な授業の進め方をした。しかし、実際に伊勢崎銘仙について生徒にわかりやすい資料が見当たらず、作成が必要になった。副読本



を作成する上で不安な部分もあるため、専門的な知識をもつ地元の方にアドバイザーとして参画してもらい、助言や検証に加わっていただいた。そして、ふるさと学習で学んだことを発表する場として学校行事の文化祭を設定したところ、「銘仙ひろめ隊」という名称で生徒の主体的な活動として発展し、地元の方の協力もあって、伊勢崎銘仙を追求する学びを深めることができた。これら一連の実践を総括して、ふるさと学習の教育的価値を認識すると共に、新たな教育課程の創造に取り組んだ。

3 研究のねらい

伊勢崎銘仙によるふるさと学習の実践を行うことで、ふるさとを誇りに思う生徒を育てる教育課程を創造する。

4 具体的な実践

(1) ふるさと学習のねらいを考え直す

平成26年度の実践は家庭科の授業で伊勢崎銘仙について専門的な講師を招き、併用紺の技術的レベルの高さを模型で示すなどの解説をしてもらい、数多くの銘仙の着物を運び込み、触って、着て、よさを実感させようとして取り組んだ。生徒が他地域の織物との比較ができるように、各種多様な織物を展示して見学できる環境づくりをした。生徒たちは予想どおりに喜び、感動した。それは珍しさの部分が大きかったと感じる。実際の生徒の感想の中に「銘仙がなぜできたのか、すごく気になった」というものがあったことから、銘仙への興味関心の高さを感じるとともに、伊勢崎ふるさと学習がねらう「郷土への誇り」を感じるにはどうしたらよいのかを教師自身が悩むことになった。銘仙の素晴らしさ・美しさだけでなく、歴史や経緯などの事実をしっかりと理解し、銘仙はなぜできたのかを学び、その答えを見つけ、現在の伊勢崎市の現状や将来を考えることが必要なのではないか、あるいはそこから郷土への誇りが生まれてくるのではないかと考えた。銘仙を教えるのではない。なぜなら銘仙は日本の他の地域にもあるものであり、銘仙を通して郷土、伊勢崎を学ぶのだと考え直した。そのためには我々教師が銘仙を知らなすぎたため、外部講師に任せるだけでなく、自分が学ぶことの必要性を実感した。

(2) 二人の教師が学ぶ

二人で今回の学習のコンセプトを話し合った。その中で見えてきたキーワードは「人を感じる・人に関わる、結論は生徒にゆだねる」などであった。役割を分担して各自が夏季休業中に調査研究を行うことにした。また家庭科担当者から生徒への夏休みの課題として、銘仙について家族や親戚・知人等への調査を呼びかけた。このように生徒と教師が銘仙について学んだ夏休みであった。

以下、二人が取り組んだ内容である。

| 【家庭科担当教師】 | 【教頭】 |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 銘仙の知識（書物、インターネット） ・ 織物全体の知識（書物） ・ 銘仙に関連する情報収集（伊勢崎の偉人、富岡製糸場、高山社、桐生織物） ・ 古着屋を訪ね質問、購入 ・ 当時の資料集め（繭、写真等） ・ 授業で使う副読本（資料）の原案作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 外部講師に相談、助言を仰ぐ ・ 伊勢崎織物組合を訪ね、質問、情報収集（地元の銘仙作家を紹介される） ・ 銘仙作家への訪問等の交渉 ・ 現在の銘仙工場をフィールドワーク ・ 銘仙の実物を元織物店から借用 ・ 授業掲示物の作成 |

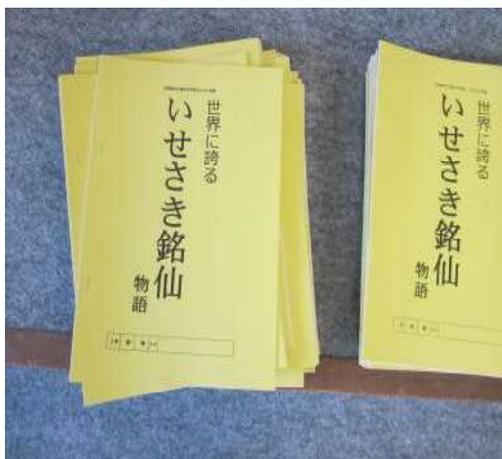
【共同で取り組む】

- ・ 銘仙に関して学んだことの情報交換
- ・ 銘仙作家の工房を訪問（8月17日）、取材し、多くの資料や情報を得る
- ・ 授業で使う副読本（資料）とパワーポイントの制作
- ・ 副読本の印刷、製本

※副読本とパワーポイントの制作には、美術科の教師も参加

（3）副読本『世界に誇るいせさき銘仙』の作成

教師自身が学ぶところから始めなければ、何も始まらないと感じ、それぞれのアプローチの仕方で臨んだ。授業で銘仙について扱うには副読本が必要であり、中学生に適した資料がないため、自ら作成することにした。そのために多くの資料を読みあさり、確実な知識を身につけた家庭科教師の努力には正直驚いた。その原案をもとに美術科担当教師も加わり、レイアウトを整え、3人で熟考を重ね、副読本づくりに取り組んだ。そして出来上がったのが『世界に誇るいせさき銘仙物語』である。（下写真）内容は以下のようになっている。



B5サイズの副読本 全15ページ
「世界に誇るいせさき銘仙物語」

目次

- 第1章 上野国の佐位郡佐位郷～群馬県伊勢崎市
は昔から絹のまち～
- 第2章 伊勢崎絹の誕生
 - ①江戸時代
 - ②明治時代以降
 - ③伊勢崎銘仙を支えた地域の人々
(生徒の夏休みの課題発表)
- 第3章 黄金期が来た！
 - 進取の気性
 - 新型車は群馬で売れ
 - からりこ節（音楽CDを入手）
- 第4章 時代が変わる～黄金期からの転落～
- 第5章 夢のかけら
- 最終章 生き残るいせさき銘仙
 - 伊勢崎の偉人たち（4名）
 - 富岡製糸場と絹産業遺産群
 - いせさき銘仙とかかあ天下

この副読本の特徴として、物語風にして生徒が興味をもって読み進めることができるようにしたことがある。古くは奈良・平安時代の絹の歴史に始まり、江戸・明治・昭和へと続く伊勢崎の激動の時代。さらに生徒が夏休みの課題として取り組んだ情報を「いせさき銘仙を支えた地域の人々～生徒の取材から～」のページに掲載した。また、「進取の気性」という市民性についての説や伊勢崎の偉人たちとして田島弥平をはじめとする4名についての資料、「かかあ天下」などの雑学的な情報も掲載した。これらは銘仙のみならず伊勢崎市への理解を深めることや、生徒にとって身近な問題として感じてもらえるようにする意図をもって行った。

（4）ふるさと学習「世界に誇るいせさき銘仙」の授業（9月7日・12日）

二人が銘仙についてそれぞれ調査していくうちに共通の思いが出てきた。それは、「人

に出会わせたい、先人たちの素晴らしさ、努力を知って欲しい」というものであった。

副読本には、「先人たちがいかに激動の時代を生き抜いてきたか」「過去は未来を知る鏡である」と記載し、過去から学び、現在や未来の郷土と自分の生き方を考えることに結びつけたいと願った。授業は2年生と3年生を対象に行った。2年生は初めての学習で3年生は一昨年につき、銘仙については2回目になる。



ふるさと学習の授業の様子

授業は副読本とパワーポイントを併用して進めた。授業でこだわりたかったことがあった。それは、生徒が疑問やわだかまり、驚きなどの感情を抱き、思いを表出するような、探求型の授業形態をとることであった。

具体的には以下の4点である。

①授業全体を貫くテーマ「なぜ私達は、いせさき銘仙を知らないのだろう」

これは昨年度の生徒から出てきた素直な疑問であり、また銘仙が生徒にとって身近なものではない事実、銘仙はどうなってしまったのかということを出発点とした。

②併用緋の技術力の高さを強調

伊勢崎でしかできない技術としての併用緋に重点を絞り生徒にインパクトを与えるようにした。そのために、他地域の織物（友禅染め等）との染色過程の違いや昭和初期のアンティーク、現代のアート作品等、多くの実物を持ち込み、解説、展示をして比較出来るような環境を整えた。



授業の展示 アンティーク物の銘仙



現在風アレンジした作品の展示

③人の力、人の思いを伝える

授業の途中では生徒が調査した夏休みの課題の発表も盛り込んだ。生徒達の身近な曾祖父などが実際に銘仙に関わる多くの分業に就いていた事実が共有でき、副読本の「伊勢崎銘仙を支えた地域の人々」の記載から、より切実感を感じられたようだった。

その後、授業の終末で「生き残るいせさき銘仙」と題し、生き残る2名の機屋（はたや）を紹介した。内1名には取材ができたので、かつて群馬テレビで紹介された映像を編集し、現在の工房の写真や本人のインタビューなどから、作家の正直な思いを紹介した。そこには後を継ぐ者がいないことや高齢で不安を抱えている事実が述べられていた。授業後一人の生徒が「本当に2名しか残っていないのか」と質問に来たが、それが現状

と理解するなど、多くの生徒に余韻を残したようだった。

④授業終了後から生徒の発信がスタートする

伊勢崎銘仙の過去から現在をたどり、技術者の現状などを紹介したものの、このあとどうなっていくのか、最後は結論がなかった。生徒はこの事実をどう受け止め、何を感じたのだろうか、授業者である私達もわからないが、それが今の生徒の姿ととらえた。授業後の感想には生徒の率直な気持ちが記されていた。



2年生全体の意見

①ふるさと学習でわかったこと

- ・伊勢崎は織物に関わりが深い
- ・併用絣は世界最高レベル
- ・現在制作する人は2人しかいない
- ・今は銘仙がなくなってしまったことが悲しい

②伊勢崎銘仙を今後どうしたらよいか

- ・銘仙を伝え続ける
- ・銘仙を宣伝する
- ・伝統工芸士の減少を止めなくてはならない（技術を保証する）
- ・機織り体験を広めていく
- ・伊勢崎絣を現代風にアレンジする

(資料1) 授業後の感想等を書くワークシートと生徒全体の意見(総括)

当日の授業には3名の地域の方も参加した。授業の立ち上げから関わっている外部講師が「伊勢崎市全体の生徒にも広げて欲しい」という感想を述べ、学習の価値を生徒に伝えてくれた。また、上毛新聞の取材が入ったり、伊勢崎市教育委員会も授業を参観してくださったりと大変心強かった。

(5) 表現・発信へとつなげる「いせさき銘仙ひろめ隊」

この生徒達の発信を何とか広げたい、表現する場をつくりたいという思いから今年度の文化祭で発表することを職員に提案し、承諾を得た。しかし、この先授業を増やして学年全員で実施することは時数設定等に無理があったので、生徒有志の自主活動として取り組むことにした。そして名称は「いせさき銘仙ひろめ隊」とした。

その後、2学年職員への主旨説明や協力依頼、2年生徒への声かけ、参加する生徒保護者へ通知文の配布などを行い、8名の生徒と活動することになった。有志生徒による活動は、ここまで行ったふるさと学習の感想発表だけでなく、さらに生徒主体の探求活動を行い、それを加えた発表にしたかった。それが参加した生徒の成長はもちろん、他の生徒にも波及効果を及ぼすことや学校の活性化にもつながればと期待していた。家庭科教師は非常勤であるため、この後の活動は私、教頭のマネジメントで行った。

以下、「いせさき銘仙ひろめ隊」の活動記録である。

- 集まったメンバー7名とミーティング
(目的の確認、メンバーの抱負、今後の活動計画、明治館訪問時の質問内容検討)
- 明治館の訪問



明治館にて説明を聞く



古着市にて銘仙を見る

銘仙の本物を再度見て、詳しい説明を係の方から聞くため明治館を訪問した。当日は竿灯会の日で、多くの人を訪れていた。係員から銘仙の懇切丁寧な説明を聞く。伊勢崎神社で開催の銘仙古着市にて4着購入。

- 帰校後のミーティング (今後の方向性)
- 地元に住む元染色業の方の情報を地図で調べる。
2名の生徒と共に作業場を訪問
- 文化祭に向けた準備
パワーポイントの作成、写真の選定、銘仙に関するクイズ作成、発表原稿作成
- 外部講師による銘仙の着物の着付け練習
(当日短時間で6人を着付けるため)
- 発表練習、リハーサル
- 文化祭当日



地元の元染織業の家を訪ねる

当時の染色場がそのままになっていた。染色業について詳しい説明を受ける。

- ・ 展示コーナー設営
- ・ パンフレットを開場前と休憩時間
に来客者へ配布
- ・ ステージにて発表



文化祭での銘仙展示コーナー



美術科教師作成の
「銘仙ひろめ隊」ロゴマーク

5 実践の成果

(1) ふるさと学習の成果として

学習の成果として、まず学年全体の生徒の銘仙に関する理解が深まった。また興味関心

も高まり、中学生なりに伊勢崎市の現在の状況を把握した上で存続や復活を期待して、自分なりに出来ることに取り組んでいきたいという願いをもてたことが学習後の感想から読み取れた。(資料 1) それを受けて有志で結成した「銘仙ひろめ隊」の生徒は、教育課程外の時間に発展的な探求活動を通してより深く学び、追従した発表を行った。それを参観していた他の生徒の関心をより高めることにつながった。

発表後は大きな反響をいただいた。文化祭の記事が新聞に掲載されたため、多くの方々からの声もらった。NPO 法人「富岡製糸場を愛する会」の方から中学生が銘仙を着て学習成果を発表したことの価値を認めてくださる内容の電話もいただいた。

銘仙ひろめ隊の生徒達の感想は以下のようにあった。



銘仙ひろめ隊についての新聞記事

○ひろめ隊をやろうと思ったきっかけは、自分でお茶を習ったことがあり最初から日本の和文化に興味を持っていた。ふるさと学習で銘仙の素晴らしさを知り、もっと調べてみたいと思った。当日はどうやったらわかりやすく伝えられるかという思いが活動の最初からあり、はっきりと伝えるよう意識した。今はこれをやれたことが自信となっている。

○もともと着物が好きで銘仙を着たかった。授業で併用紺のすごさがわかり実物を見て、色や柄がきれいでさらに気に入った。着付けの練習の時から楽しくてわくわくしていた。発表は堂々とできてよかった。伊勢崎市の他の学校にも呼びかけてひろめ隊をつくってもらい、活動を広げたい。

○自分の家の近くに染色業をやっていた方がいたのに驚いた。いろいろ教えてもらえてよかった。調査活動をしていてどんどんやるきが沸いて楽しかった。文化祭の発表中は聞いている人の関心の高さをステージ上でも感じた。今はこれをやれて度胸がついた。他のことにも挑戦したい気持ちがもっている。

彼らはその後、自身の生活に張りが出て学習や自主活動等に果敢に取り組む姿が見えてきたことも喜ばしい成長である。特に伊勢崎ふるさと学習の目標「地域のよさを学ぶこと」を通して、視野を広げて物事を考え、課題を解決するとともに、自分の意見や考えをわかりやすく表現できる」に迫ることができた。そして、生徒が自信と表現力を身につけられたと感じる。

また、同時期に3年生の生徒1名が上毛新聞主催の「シルクカントリー群馬」中学生の部で大賞を受賞したことも学習の一つの成果と言える。作文の内容は小学校2年生の時の機織り体験の感動が中学生になって今回、銘仙を詳しく学ぶことで銘仙の奥深さに改めて感動したというものであ



上毛新聞主催「シルクカントリー群馬」金賞作品

る。地元伊勢崎の銘仙から感じた誇りを十分に作文で表現していた。

(2) 教育的価値の関連と普及

この授業と関連を図り「ぐんまの道德」の中から「伊勢崎銘仙とともに～下城弥一郎～」を2・3年生の担任が道德の時間に実施した。(平成27年11月)郷土のために私財を投げ打って染織講習所を設立した弥一郎の生き方から郷土愛を十分に感じたようである。これは郷土学習の取り組みを生徒の心情面から後押しするものとなった。

また伊勢崎市家庭科主任の有志を集め、家庭科とふるさと学習(伊勢崎銘仙を通して)の授業実践を学び合う機会をもった。(平成28年1月6日)教材や作成した副読本も配布した。

さらに伊勢崎市教育委員会主催の未来会議で今回の実践を発表する機会をいただいた。(平成28年3月7日)今後、郷土学習としてどう実践していくかや各中学校での教育課程編成の契機になればと考える。

(3) 生徒の意識の変化

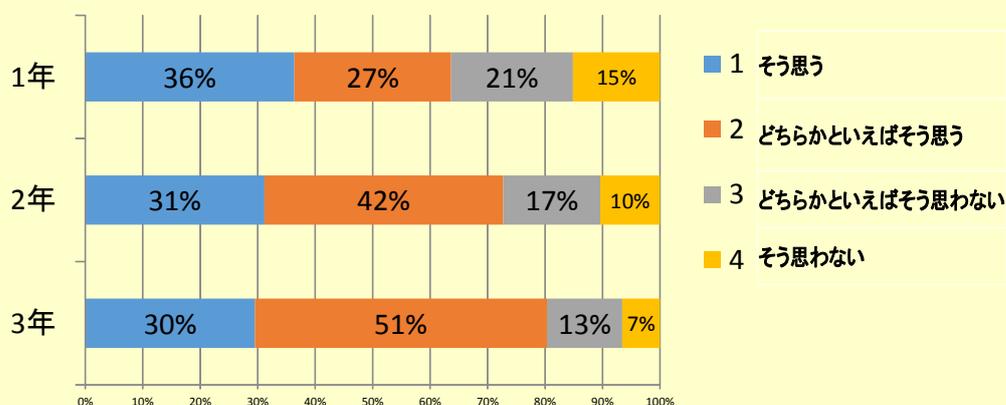
ここに平成27年12月に実施した生活学習状況調査の結果がある。「自分の住んでいる地域を誇りに思いますか」という設問で、学年が上がるごとに回答1と2を合計した「誇りに思う」生徒が増えていく結果になった。これも学習による大きな成果である。



市家庭科主任会での学び合い

自分の住んでいる地域を誇りに思いますか

平成27年12月実施



6 まとめと今後の課題

郷土学習における郷土の産業・歴史・文化等は、1つのフィルターであり、それを通したときに必ず通過する根幹となるものは、「地域に生きる人々」であると今回の実践から強く実感できた。郷土に生き、産業や歴史、文化を築いてきた人々、あるいは現在も頑張っている人々の姿から、人の思い、人の知恵や工夫、人の生き様を感じ、そこから生徒自身が自らのアイデンティティを実感し、郷土への愛着や誇りを学ぶのではないかと認識することができた。今回生徒が人々との関わりの中から学んだことを以下のように考える。

- ・生徒の家族や親戚等の身近な人々が、かつて銘仙に従事していた事実
- ・日常生活から銘仙を生み出し、併用拵などの高い技術力で伊勢崎の産業を発展させ、地域を築き上げてきた人々の歴史
- ・隆盛期の名声は消えてしまっても現在もなお作品をつくり続ける地元の作家の信念
- ・明治館にて出会った係員が銘仙を愛し、普及を願い、新事業の立ち上げに尽力する姿
- ・かつて銘仙の染色業を営む方が生徒の同じ地区に住んでいて、その作業場から感じた当時の息づかいと銘仙への身近さ
- ・銘仙の着付けを担当して準備を重ね、文化祭を盛り上げてくれた外部講師の方の思い

こういった人々との関わりが、生きる素晴らしさや、生きる誇りをもたらし、自分の生き方に反映していく契機になっていくのではないかと考える。そうであれば、どれだけ地域の人に関わるか、積極的に関わろうとするかを教師が学習の場として設計していくマネジメントが重要になる。教師が地域に目を向け、地域の貴重な教材の価値を認め、地域の人々と共に取り組み、子ども達の誇りある生き方に導いていく学習や教育課程の編成がますます重要になっていく。

平成28年度末にふるさと学習の全体計画と年間実施計画を完成した。ふるさと学習のねらいを受け、各教科・総合・特別活動との関連の図りながら、今回の伊勢崎銘仙の実践は2年生に位置づけ、定着を図っていく計画である。

今後もふるさとを愛し誇りに思う生徒の育成に向け、教育課程の整備に取り組み、価値ある郷土学習を学校と地域が一体となって創造し、実践していきたい。そして今後、伊勢崎銘仙に関する学習が伊勢崎市全体の教育課程として位置付けていくことを願っている。